

三鷹市 吉村昭 書斎

MITAKA CITY
YOSHIMURA AKIRA
WRITING ROOM



吉村昭と田野畑村

蓬萊屋^{ほうらいや}という大きな旅館に泊り、翌朝、バスに乗って田野畑村の鳥越^{とりごえ}についた。およそ三年ぶりであった。(中略)

私は、潮の香に包まれながら腹這いになって、再び切り立った崖の上から濃紺の海と砕け散る波を見た。錆びついていた私の頭が、清冽な水で洗われたようにいきいきと働き出すのを感じていた。

(吉村昭「私の文字漂流」平成7年新潮文庫)

吉村昭は、昭和41年(1966)、「星への旅」で第2回太宰治賞^{さいざいじしょう}を受賞しました。第1回は該当者なしだったため、初めての太宰治賞受賞者となりました。

吉村は、学生時代から小説を書き始め、結婚後も会社勤めをしながら執筆に励みました。昭和34年以降、「鉄橋」、「貝殻」、「透明標本」、「石の微笑」で4度芥川賞の候補に挙がりましたが、受賞には至りませんでした。そうしたなかで、昭和40年、妻の津村節子が「玩具」で芥川賞を受賞したことで、吉村は会社を辞め、執筆に専念します。そして、かねてより、友人から岩手県

下閉伊郡田野畑村^{しもへいでんのかはたむら}が小説の題材になり得る地だと勧められていたことから、田野畑村に旅に出ました。濃紺の海と断崖絶壁の景色に魅了された吉村は、その雄大な自然から強いインスピレーションを受けて、「星への旅」を執筆しました。



鶴の巣窟(岩手県下閉伊郡田野畑村)

昭和39年に執筆書房が創設した新人賞。昭和39年に中絶したが、平成10年(1998)に「鷹市」との共同により復活。平成11年から5年間、吉村は選考委員を務めた。

「星への旅」

「星への旅」は、日常生活のなかで無力感や倦意感を抱いた主人公・圭と4人の青年たちが、死の旅路へと向かっていく短篇小説です。

吉村は、「死のう団事件」についての新聞記事からストーリーの着想を得て、現代に通じるフィクションを書こうと考え始めます。そして、鶴の巣断崖に腹這いになって覗き見た、屹立した断崖と濃紺の海を思い浮かべながら、田野畑村の自然を描写しました。

当初、「星への旅」は原稿用紙78枚の短篇小説で、雑誌「文学界」に掲載するために執筆されました。しかし、編集者から枚数を大幅に削減するよう求められ、採用には至りませんでした。その後、吉村は筑摩書房刊行の雑誌「展望」で太宰治賞の募集を目にし、さらに推敲を重ねて太宰治賞に応募します。「水の墓標」と2作を応募しましたが、「星への旅」が受賞しました。

吉村は田野畑村を舞台に、数々の作品を執筆しました。小説は、「星への旅」、「海の奇蹟」、「海の壁 三陸海岸大津波」(のち三陸海岸大津波)に改題、「幕府軍艦 回天」始末、「海猫」、「梅の蕾」、「漁火」、エッセイは、「高さ50メートル 三陸大津波」、「真夏の旅」、「陸中海岸の明暗」等が挙げられます。

吉村にとって、田野畑村は小説の素材を得た重要な地であると同時に、休息の場でもありました。毎年夏に家族で訪れるなど、自然の豊



吉村昭「星への旅」
昭和41年 筑摩書房 三鷹市蔵

かさとの人のあたたかさに包まれながら時を過ごし、村が募集した「牛のオーナー」や「懐かし村民」にもなっています。

吉村は仕事の取材以外の旅はしなかったのだが、田野畑への旅はそれが唯一取材メモを持って行かない憩いの旅であった。

(津村節子「三陸の海」平成25年 講談社)

夫婦で愛した田野畑村

田野畑村に30回以上も訪れていた吉村は、平成2年(1990)8月、田野畑村名誉村民になりました。平成7年には、コミュニティカレッジ田野畑95にて夫婦で講演を行いました。吉村は「歴史小説うらばなし」、津村は「創作ノートについて」の演題で、会場のホテル羅賀荘には約400名が集まったといえます。そして、平成8年には、鶴の巣断崖園地内に「星への旅」の一節が刻まれた吉村昭文学碑が建立されました。

津村もまた、「人と自然が寄り添う村」、「花笑みの村」等、田野畑村についていくつものエッセ

イを執筆しました。平成9年に思惟大橋付近に津村節子詩碑が建立され、平成31年1月には津村も田野畑村名誉村民になりました。そして、津村は吉村の没後に発表した『三陸の海』で、吉村と過ごした田野畑村での思い出を綴っています。



吉村昭文学碑



吉村昭(1998年撮影)



津村節子詩碑

三鷹市 吉村昭 書齋

MITAKA CITY
YOSHIMURA AKIRA
WRITING ROOM

〒181-0001
東京都三鷹市井の頭3-3-17
TEL:0422-26-7500
HP:https://mitaka-sportsandculture.or.jp/yoshimura/

京王井の頭線井の頭公園駅より徒歩3分



公益財団法人 三鷹市スポーツと文化財団
Mitaka City Sports and Culture Foundation

発行日:令和8年3月31日